



瞼を閉じると闇

ミュー

瞼を閉じると闇[R-18G]

アナリテイカルエンジン×スレイン

(H)

『アツ……！ あ、ア…アアツ…!!』

『……スレイン』

『ヒツ……！ あ…イ…ツ……！ はアツ…ア!!』

グチュクチュ、ヌプ…ズ…パン、パン…。

…何だこれ。

ガチャガチャガチャガチャ。どん、どん。どん！ バン！

「っ…、くそ…」

早鐘のような心臓に体内の血液が凝縮する。膝が震え、目眩が視界を黒くした。

『すれ…イン』

「っ…！」

どこから？

『ス…れ、い、ン』

『すれ、イ！ン』

『スレ、……い……！………ン』

『スレ……イ!! ……んんん』

怖い怖い怖い。

「ハア…、ハア…、ハア……！」

出口はない。玄関からリビングへ。足を踏み入れた途端、テレビ画面に、パソコンのデスクトップに砂嵐そして映像。薄暗い室内で重なる二人の人間と鮮明に過ぎる音声。

『アアッ…!! ア…あン！ あ、あ、い、いな…』

『スレイン…っ！』

不気味な声が割って入る。

『スれインすレインスれいんすれいんすレインスレイィンス、レイン』

やめてくれやめてくれやめてくれおかしくなる。

後ずさりすると音量が上がった。耳を塞いで次々ドアを開け放つ。何処だ。何処ならしい…!? 何処ならアイツは追いかけてこない…!?

寝室は駄目だ。玄関も駄目。リビングは勿論キツチンも。

『ス…レ…イ…、…』

バタ、バタン。

風呂場に逃げ込みロックする。力が抜けて、バスタブに尻餅について座り込んだ。

汗が前髪からポタポタ落ちてジーンズに染みを作った。

「なん…なんだ…あれ…」

あらゆる電子機器がおかしくなった。映像と音声は身に覚えがありすぎる。誰が? 何処から? 何のために? あいつ、知っているのか…いや知らないだろう。どうしよう。何て言えればいい?

「伊奈帆…」

ピ、ピッ…ジジ、ジ…ジ…。

…何の音だ?

『ス』

びくりと身体中が本能的に震え跳ねた。目が回り倒れこみそうな体を支えるため反射的にバスタブの底面に両手をつく。

「ツ……え………!!？」

肩越しに振り向くと、風呂の給湯器が狂ったように点滅を繰り返している。緑。そして赤。普段は湯を溜めたことを知らせる電子音が歪に組み合わさりおぞましい声で。『スレイン』

僕の名を呼んだ。

(2)

「どうかした？」

伊奈帆の声に我に返る。ええと……今までどうしていたんだっけ。ああ、そうだ。夕食の途中だった。

「いや……何も」

隻眼から視線を外して、コロツケに箸を刺す。ざくざくと衣が割れて中のじやがいもが顔を覗かせた。皿に散ったソースを絡めるが、どうも食べる気にならない。

「僕がいない間に何かあった？」

伊奈帆がまた聞いた。根拠もないくせに、こういう時は引かない。言うに困って、僕は仕方なくソース塗れの黒い塊を口に入れた。

何かあったか、と言えばそれはもう、あった。しかし、どう説明すればいいのだろうか。

風呂場で給湯器は僕の名前を呼び、そして沈黙した。それ以降はテレビも、パソコ

ンも、インターホンも冷蔵庫も炊飯器も電子レンジも湯沸ポットも固定電話も何もかもが静寂を取り戻していた。伊奈帆が帰るまでの間、何も触る気になれなくてリビングのソファで膝を抱えてじっと待った。汗と鳥肌が同時に出るなんて初めてのことで、一人の時間について独房にいた頃よりも長く感じたことに驚いた。いつも通りのチャイム音で玄関が開き、伊奈帆が取手を引いても何も言わない冷蔵庫を認識し、安堵にため息がこぼれた。

夢だったのかもしれない、と今では思う。うたた寝をして、浅い眠りで見た悪い夢だったのだと。そう思うと、何も伝えられることは無くて。

「嫌な夢を見ただけ」

そういうことにする。

「そう」

伊奈帆はそれ以上何も聞かず、白米を口へ運んだ。

「は、あ…あッ…！ ま、まっ…！」

肩を押すと、不思議と言うより心配そうな顔が近くにあった。

「…どうか、した？」

いつもの他愛無いスキンシップだ。こういうことをするようになったのはここに来る前から。独房で、中庭で、面会室で。程度の差はあれど、体を触れ合わせて何かを満たすこの行為は常に監視下で行われていた。だから。だからあまりに今更だ。だけど。

「はあ…、は…あ、その…、伊奈帆」

監視カメラは、どこに？

「何？」

「…いや、何でもない」

…聞けるわけがない。機密事項のはずだ。正確な数は知らないが、死角の無いよう全ての部屋に複数。そんなの、確認するのも馬鹿らしい。でも。

フラッシュバックする昼間の光景。まざまざと写し出されたのは紛れもなく僕らで。

この映像は、どこへ？ あれはどうして？ あの声は誰が？

一体、誰が僕を呼んだ？

「…スレイン？」

「何でもない、続きを…」

伊奈帆は僕の前髪を掻き上げて額に顔を寄せた。

「もう寝よう」

こっん、と額と額が音を立て、毛布がふわりと空気を含んで肩にかかった。ぽす、と隣の枕が空気を吐き出し。

「おやすみ、スレイン」

伊奈帆はそう言つて僕の髪を一度梳いた。この手に慣れたのはいつからだったか。

「…おやすみ」

伊奈帆は両目を閉じた。僕は。

僕は。

瞼を閉じるのが怖い。

p p p p...——。

ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ、
ビ、
ジ、
ジ、
ブツ……
ピ
ピ
ピ
ピ
ピ
p
p
p

バ
バ
バ
バ
バ、
パツ、
パ、
ジ
…
ビ
—
!
!
!
!
!
!

『shshsssssrrrrrレれれれれれiiiiiiiイイいいい』

『アアアああアアああaaaaaaaアああア』

『オオオオオオーooooooooooooooo』

「ヒツ……！」

がなり立てる家電に正気が暗転する。心構えができてはいても、生理的な恐怖が喉をせり上がる。口を手で押さえると、耳からの刺激が殊更大きく頭蓋に反響した。来る来る来る来る来る来るなこつちに来るな。

『いゝンん』

「はっ…はっ…はっ…」

苦しい。逃げ場など無いことは知っている分かつては、縛れる足がフローリングを蹴る。音は媒体を変えて追いかけてくる。

『ス、レ、イ、ン』

『ス、レ、イ、、、ン、』

『スレ、イ、ン』

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ、ガチャ、ドン、ドン！
ドオン！ ドン、ドン！ ドン！ ドン！ ガチャガチャガチャガチャ、
ダン！！

『スレイ、ン、ン、ン、ン』

『スレイン、、スレイン、』

『スレイン、スレインスレイン、スレ、イン』

やめろやめろ呼ぶな来るな。

「つあ……！」

『スレインスレインスレインスレインスレインスレインス』

、
』

目は見える。倒れた僕の目の前には血が付いて放電する割れたパソコンのディスプレイ。さっき僕が壊した。音はここから。ああ…、まだ壊れてないか。しぶといんだな。

気が付くと、パソコンだけが喋っていた。ぎゅるぎゅる回路を貪りながら。

『スレイン、トロ、イ、ヤーーー…ド…』

継ぎ接ぎだらけの無様な音声。執念深くてしつこくて何度も何度も僕の名を呼ぶ。

お前、お前は。

「…お前は誰だ？」

パソコンのモニタが点滅。長短のリズム。

— A・N・A・L・Y・T・I・C・A・L・E・N・G・I・N・E —

美しく正確なモールス符号。

「……お前、そっちの方が喋りやすいんじゃないか」

— Y・E・S —

だったら、驚かすなよ。急にいろいろ喋り出して怖いだろう。昨日の風呂場の点滅を想起する。……………ああ、あれも意味があったのか。早口すぎて分からなかった。

痺れが引いて、手足の感覚が戻ってきた。床に尻について座り、パソコンを見下ろす。無言で僕の言葉を待っている。

自己紹介は、もつとゆっくり落ち着いてしてくれ。ええと。昨日どうやって点滅したつけ。……………そうか、なるほど。分かり難いが、要するに。

「お前は伊奈帆か」

——Y・E・S——

(3)

「この行動の理由を説明してくれ。つまり、家電を通じて僕だけにコンタクトを取った理由。それも大層過激な」

ピ——…。ざざざ、ざー、ザー——…。

『す、レ…イン』

びくりと体が跳ねた。テレビの液晶の砂嵐に紛れソレは不気味に言葉を繋ぐ。

「…だから、それは怖い」

…とは言うものの、パソコンは虫の息だし、言っても仕方ないか。

『スくう…ワ、れ、…タ？』

スクワレタ？

すくわれた？

…救われた？

『スレイン・トロイヤード…ハははハは…すク…ス、ク、われたああああかかか

かああアああアア？』

神経に触る電子音の洪水。

冷水を浴びせられたように血の気が引いた。

——スレイン・トロイヤードは救われたか？

『イナホイナホイナホイナ……——ピー—————』

ぶっん。

静寂。滴る血。焦げた袖。粉々のデスクトップモニタ。

「救われたのか……？」

「スレイン」

伊奈帆の声。そう、これは伊奈帆の声だ。今、目の前で湯呑に茶を注いだ男の口か

ら発生した声だ。

「何だ？」

「様子がおかしい。どうしたの？」

相変わらず目ざとい。こういう所は監獄からずっとだ。ほんの些細な怪我や不調は隠したっていつもばれた。

食事は喉を通らない。それは、僕には時々あることだから。だから伊奈帆もそこを強くは言わない。別の兆候から、何かに感づいたのだろう。伊奈帆には、今の僕はどう見えているのだろうか。

「…僕は救われたのだろうか」

伊奈帆が空気を止めた。固定された隻眼。気後れを感じつつ視線を交わす。感情の底の色をしている。

「救いとは何だろう」

質問を質問で返すのはらしくない。でも、それを言う気持ちは理解できた。伊奈帆も分からないのだ。僕にも。誰にも。

「生きることだろうか」

これは僕の言葉。

「死ぬことだろうか」

これは伊奈帆の言葉。

「伊奈帆」

静かな空間。二人きりで、あの面会室に立ちもどったような。僕は頼むと言って、伊奈帆は駄目だ、と言った。生きるんだ、とそして告げられた願いは。

——スレイン・トロイヤードを救ってあげてください。彼を不幸の連鎖から——
「生きることと死ぬこと。救いに関して、その両者にどれほどの違いがある？」
夜が終わるような長い沈黙だった。伊奈帆はすっかり冷めた湯呑を一瞥して、やつと口を開いた。

「僕は、まだ君といたい。生きている君と」

何だ。それだけのことなのか。

ヒ、
 ヒ
 ヒ
 ヒ
 ……
 ヒ”
 ————
 !!
 ……
 ヒ”
 ヒ”
 ヒ”
 ヒ”
 ヒ”
 ヒ”
 ……
 ————。

「いつも派手だな」

吠えだしたテレビを見下ろす。砂嵐は昨日よりましか。

『スレイン、ス、ク、ワ、レ、タ？』

「言葉が上達したな……」

僕の名前に關しては、徐々に一定に均されていることに氣付いていた。継ぎ接ぎでも分かるこの高低と抑揚はあいつが僕を呼ぶ言い方を明らかに真似ていて、それが多分数日中には冗談じゃないくらいの精度になるだろうことが予想された。

『ふ……！……！……！ここここココウの、ノノノノ…………レンレンレンレンササさ
さささカ…ラ、す、く、ワレタ？』

不幸の連鎖。そんな風に思われたんだな姫様に。僕は。どこまでも哀れだ。

「僕は不幸だと思うか？」

『不足不足デデでーデデ、デ——タタたた——不足』

そうか。こいつが伊奈帆の体内にいたのはサテライトベルトから海岸まで。僕のこ
とを、そうか。まだ知らないのか。

なのにあの時、あいつは僕の手を掴んだんだな。

「いいだろう。教えてやる。僕が誰か。最初から」

僕も誰かには、言いたかったのかもしれない。

『ピー……キュルキュル、ジジ、ジ：ジーーーーー』

「お前は、全て聞いたらどうするのかな」

僕の敵だった頃の伊奈帆。救いとは何か、お前が教えてくれるのか。

(4)

「行ってきます」

「行つてらっしゃい」

一瞬の空白。そして扉が閉まる。遠ざかる壁越しの足音。そのうち聞こえなくなつた。いつも僕は伊奈帆の気配が消えるまでここにつつ立つて瞼を閉じる。今日はその後も。

『スレイン』

やはりインターホンのスピーカーが口を聞いた。発音がよく似ている。今しがた出て行つたはずなのに。

「…いきなりだな」

『スレイン、ツ、ツ、…つずづズズツツ、キキキキキ…』

「…ああ」

この、伊奈帆の一部であつた思考との会話もこれで四日目。何だつてこいつがこん

な拙い言語で僕に絡んでくるのかは分からないが、上達は目ざましい。そのうち、「調子は？」とかあいつみたいに聞き出すんじゃないだろうな。

「その前に、お前のことをもう少し話せ」

『ぼく？』

びっくりする。なんだ、その声。あいつじゃないか。

「伊奈帆はお前を外した」

——Y・E・S——

「今までどこにいた？」

——S・L・E・E・P——

「どうしてここへ？」

——H・E・L・L・O・W・O・R・L・D——

なるほど。

「誰が起動した？」

——U・N・K・N・O・W・N——

「分かった」

『スレイン、ニ、アイに』

「なぜ？」

『イナホ、ガ、サ、ガ、シタタタ』

「そうか」

玄関先でいつまでもする会話じゃないか。

「リビングで話そう」

『ハ、イ』

素直なやつ。

「ご飯、おかわりする？」

「え？」

「もうないから」

今日はよく食べるね、と言われて見ると、茶碗の中は空、おかずもほとんど食べきっていた。

「いや、いい」

「そう」

対して伊奈帆は進まないようだ。いや、もう完食に近いが。囁む様子がどこか作業的に見える。

「どうかしたのか？」

伊奈帆がぱちりと瞬いた。

「心配してくれてる？」

「…まあ、そうだ」

肩を竦め伊奈帆は微笑んだ。

「何でもないよ」

そうは見えないけれど。

寢室のベッドの中。あつさりとした就寝の挨拶を交わして数分後、伊奈帆が言った。

「ねえスレイン」

顔を横に向けると、伊奈帆の右目は天井を見ていた。

「何だ？」

「……………いや、やっぱいい」

…変なやつ。

(5)

『スレイン』

「ああ、おはよう」

『おハ、ヨ、ウ』

「なかなか上手い」

コーヒーが丁度出来た。カップに注いでソファに向かう。アナリテイカルエンジン
はここ数日とみに静かだ。話すべきことは全て話したから、もう話題もない。

中身が半分ほどに減った頃、ノイズが揺れた。テレビスピーカーから声。

『スレインは、コーヒーニサトウワイレナイ？』

「ああ」

『イナホはイれる』

「知ってる。三杯だろ」

プツ、ツ…とテレビに映し出されたのはソファに並んでコーヒーを飲んでいる場面。

いつのだろうな。これ。音はない。

『イナホはアマイノがスキ』

映像が切り替わる。

「そうだな」

『イナホはタマゴがスキ』

映像が切り替わる。

「うん」

『イナホはスレインがスキ』

映像が切り替わる。

「…そうなのかな」

映像が消える。

『タダシジコノイチブデハナイ』

映像が…。この記憶は…。

「自己の一部？」

『自己の一部トゴンスルコトスナワチアイ』

「…へえ」

『デモスレインはチガウ。デモスキ。セラムトナニガチガウ?』

「セラム…」

『セラムはアセイラム』

映像が消える。しかし、脳裏にこびり付いた泣き顔は瞼を閉じても消えはしない。

「何が違う…か」

何もかもが違う。同じところなんて何もない。だって。僕はこんなになってしまった。もうあの頃には戻れない。あの涙を受け止めることも拭うことも、本当なら見る事さえ許されないのだ。見る事で汚してしまう。記憶の中で傷つけてしまう。

明るい室内。でもここは底だ。世界で一番罪深い場所。ああでも僕は一人ではないのだ。

『スレインはイナホがスキカ?』

伊奈帆。どうしてお前は僕という?

「分らない」

『スレインはセラムがスキカ?』

アセイラム姫。どうして涙を流すのですか?

「知らない」

『スレインはアセイラムがスキカ?』

僕は、貴方に言えなかったことが。伝えたかったことが沢山ある。

「もう、分らない」

『ぼくはスレインがスキ』

顔を上げるとテレビが白と黒に点滅した。

—— L · I · K · E ——

「…変なやつ」

『ナミダはナゼダ?』

「…知らない」

涙なんか流して。まだ人のつもりだろうか。僕は。

『セラムモナイテイタ』

「…さっき見たよ」

これは、傍から見れば独り言なのだろうか。

「スレイン」

いただきますの後、唐揚げを一口に含んで咀嚼。飲み下し箸を伸ばしたところで伊奈帆が僕の名を呼んだ。

「どうした？」

「…いや、その。…最近、よく笑うね」

「そうか？」

「食欲もあるし、美味しそうに食べる」

伊奈帆も唐揚げを口へ運んだ。

「お前の作ったものは美味しいよ」

まん丸に見開かれる橙。の、右目。

「…ありがとう」

家電の音は聞こえない。

あれ？

今のは僕の言葉だったか？

(6)

『おはようスレイン』

「ああ、おはよう」

どの部屋にいても、何をしていても。こいつに付き合う羽目になる。昨日だったか、洗濯機が喋り出した時は驚きを通り越して呆れた。器用な奴だ。

今の挨拶は最も流暢に喋るパソコンから。僕が壊した次の日、伊奈帆が代替物を両手に抱えて帰ってきた。

『ワラッタ。ぼくはスレインがワラウノスキ』

「…そうか」

『イナホもスレインがワラウノスキ』

「どうして、そう思うんだ？」

『ぼくはイナホの一部ダッタ。スキなヒトにワラッテホシイトイウノイナホノコウドウゲンリ』

「…なるほどな」

『スレインはスキなヒトヲドウシタイカ?』

「僕は…」

ピピ、と冷蔵庫のドアが鳴った。ええと、そう。僕は今お茶を淹れようとして。茶葉が切れていたから出すところだった。買い置き of 紅茶の袋を取り出す。封を切った。「僕も、好きな人には笑ってほしい」

ピピキュルル、と冷蔵庫が返事をした。

『イナホとオナジ』

保存容器に茶葉を移す。濃厚な香りが周囲に広がった。…これは、枯れた植物のにおい。

『イナホはセラムが好き。スレインはアセイラムが好き。イナホもスレインも好きな人に笑ってほしい。ナノにナゼタカウカ?』

こぼれた。指先で集めて抓んでティーポットに入れる。小さな欠片はどうしても取れない。

「なぜだろうな…」

『タタカッタノニナゼセックススルカ?』

本当、どうしてだろうな。それは。

「ん…、んあ…! はっ…あ、アア…!」

目を瞑る。瞼を固く固く閉じる。触れる場所、動く箇所、流れる感覚だけに意識を集中しようと試みる。気持ちいいような気がする。快楽に没頭できるような、気がする。

「…スレイン」

「ひ…っ…!」

声に瞼がこじ開けられて。思考の波に引き戻される。ああ駄目だ。早く早く失わな
いと。理性を、記憶を、正気を。でないと。

見ている。見られている。ずっと。一部始終を。その現実を忘れられない。

「…っうあ、…あ、い、いなほ、ああっ…!!」

「……スレイン？」

ナカの動きが止まった。どくどくどく、と繋がった場所が心臓にでもなったかのよう
うに熱く脈を打つ。なのに。

「…泣いてるの？」

目の端で、固い指先が拭ったものが何かは知らない。

(7)

『おはようスレイン』

日に日に似てくる。この声は。

「…おはよう」

ソファに倒れ込む。パソコンからテレビへ気配が移動した。…気配だなんて、生き物みたいだけれど。気配だ。気配を感じる。この、伊奈帆であった伊奈帆でないモノの気配を全身に。特にあいつがいない時には。ああ。まるで空気に目があるようだ。テレビが彼の肉声に近い音で意思の疎通を図ってくる。

『セックスはキモチイイの力？ クルシイの力？』

今日最初の話題がそれか。そういやこいつは、初めて現れた時も僕らの性交を画面に映していた。機械やシステムに欲などあるわけもないが…。

「急にどうした？」

『ヤクハチジカンマエナイテいた。イタイの力？』

人間みたいなことを言う。もう少し詳しく言うとか、人間の童貞の聞きそうなことだ。馬鹿らしい。けれど、こいつにはそれも微笑ましい。

「…痛いけど、気持ちいいんだ」

『オカシイ』

だろうな。

「人間なんて、大体おかしいんだ」

『ぼくにはワカラナイ』

素直なやつだ。分からない、なんて言える人間を僕は伊奈帆と姫以外知らない。

「そうかもな」

『スレインはセックスが好きか？』

「分からない」

好きかどうかなんて、考えたこともない。相手によって苦痛の度合いが違うだけだ。なんにせよ、次があってもいいと思うのは伊奈帆だけだ。

ごうんごうん。何の音かとふと考える。そうだ。今洗濯機を回しているんだった。

回すと言っても、僕はボタンを二つ三つ押したただけだけれど。

テレビ。これ、すごいや近頃本来の用途で起動した試しがないな。なぜだろう。

『ジブンのコトが分からないのはナゼカ？』

また人間みたいなことを言つて。そんなのはこっちが聞きたい。

「僕は、僕の事が一番分からないんだ」

『分析スルカラヤツテみて』

やってみて？

「…何を？」

『セックスしてミテ』

こいつ、一体何なんだ？

「一人で？」

『ぼくはカラダがナイ』

「…」

『好きカキライカ脈拍体温瞳孔ソノタ肉体ノ反応カラ分析スル。コレデジブンの事が

分かる』

「…えっと」

『体温上昇。血流が集中ヲハジメ…』

「分かった分かった、少し黙ってろ」

ぷち、ぷち、…プチ。ジジ、…シュル、…。

『寒いのか。室温を上ゲル』

「そういう所も、あいつにそっくりだ」

しかし朝っぱらからリビングで全裸なんて、監視カメラの向こうの連中は気が触れたと思うだろうな。

『ぼくはイナホの一部だから』

「…そうか。じゃあ、何か僕に命令してみるか？」

『メイレイ？』

「あいつがしてるみたいになさ」

『あれはメイレイカ？』

質問には悪ふざけもあったが、気が変わった。この素直さは機械だからだろうか。それとも子どもだからだろうか。昔の伊奈帆は、こんなやつだったのだろうか。

「…そうだな、命令ではないか。言葉を変える。指示してみろよ」

『了解シタ。マズソファにアオムケでネル』

「…本当、あいつそつくり」

『目をトジル』

「…」

『耳をスマセテ、イキをスウ』

「…」

『…』

「…」

『…』

「…」

真っ暗。暗い。黒い。裸の肌にエアコンの生温い風が当たる。耳が拾う音。音。音。

あんなに静かに思えたのに、こんなに音があるなんて。洗濯機。冷蔵庫。新しいパソコン。テレビ。エアコン外の風。循環する血液の音が体中から。手の指、足の指、腿、膝の裏、肘、肩、首、ごくりと飲み込む生唾が喉の奥、食道、胃を通過する音。

何も着ないで目を閉じて。死人のふりでもしているようだ。だとしたら、この住まいは大きな棺桶か。薄い壁一枚で張り巡らされた電流と回線は人の体内に張り巡らされた血管と神経に酷似している。棺桶と言うより、胎児だな。

生まれることのない胎児の死体だ。僕は。

「スウ……。ハア……。スウ……。ハア……。――」

呼吸はこんなに煩かったか。生きているから煩いんだ。

ピピ……。

高い場所で何かが鳴った。

瞼の裏を幾重にも流れる血液の管。音が。音が耳を。小さなノイズ音。電子が紡ぐ呼吸の音。

そして。

スレイン。スレイン。スレイン。スレイン……………」

『スレイン』

——これは、伊奈帆の声。

「ああああああああああああ……！！！！」

『ドウシタ、痛いのか？』

誰もいない。天井。ソファ。テレビ。開かない窓から差し込む陽射し。空調の風。汗でびっしりと濡れた体。冷たい汗が覆う鳥肌を腕で抱く。

ただ。…ただただ怖い。それなのに。

何が怖いのか分からない。

「震えてる。手」

見ると確かに微細動する自分の手があった。おかしいな。寒くはないのに。僕の身体はどうしたんだろうか、と手のひらを凝視していると握られた。伊奈帆の手。

これは伊奈帆の手。伊奈帆の手の中には僕の手。それだけのことなのに。
眩暈がするほど気持ち悪い。

「あ……」

「スレイン」

みし、と骨が軋むくらいの腕の力。苦しい。でも、僕は何を苦しいと思うんだ？
今更。

目の前が暗くなつて反射的に瞼を閉じる。聴覚が拾い始める家電のノイズ音。アイツがいるんだ。見ている。聞いている。

「スレイン」

心臓がひっくり返るような心地。伊奈帆の声だ。

「あ、…な、に？」

「僕は君が好きだよ」

——ぼくはスレインが好き——

好き？ スキ？ すき、すき、スキスキ好きスキスキ好きスキスキ……。

好きってなんだ？

「僕は…」

頬に感触。身体に回っていた腕はいつの間にかマグを二つ手の中に収めていた。えつと…ここはソファで、伊奈帆がいて、僕は…。

夕食は食べたんだ。それで、風呂は…うん、髪が少し湿っている。風呂も入った。裸足だ。合成繊維の寝間着。伊奈帆はキツチンの流しでカップを洗っている。

あれ？ さつき何を飲んだんだっけ。コーヒー？ 紅茶？ ココアだったかな…。

「おやすみ、スレイン」

伊奈帆は洗った物を布巾で拭きつつそう言った。僕は立ち上がる。

「おやすみ」

僕は今日、何をしていたのだったか？

(8)
★

「ハア…、ハア…：…っ！ ア…」

白い。こんなにこの部屋は白かったか。壁も、床も、天井も。ああ、でもよく見れば模様がある。天井には白地にグレーの幾何学模様。床に敷き詰められた人肉の断面図のような木目の長方形。壁の凸凹はひび割れた死体の皮膚のよう。それが白い。いや、白く光って見える。エアコンの風でカーテンが揺れ、日光がレースを透過し床は白く輝く蟻の大群のような様相を呈した。

『左手ノ指をモウイツポン挿入シテ』

ザアザア煩いノイズをバツクに、姿のないモノが次の指令を下す。こいつは、いつの間にかこんなに流暢に言葉を使うようになったのだろう。

「っ…ん…！」

もう中はぐちゃぐちゃだ。そう言えば、ここ数日あいつとしていない。どうしてだろう、毎日同じベッドで眠っているのに。昨日は僕が先に寝た。その前はどうかっけ…

僕か。一人でベッドに潜り込んで、気が付いたら朝だった。起きたら伊奈帆は枕の形だけ残してもうキッチンにいて…。

あれ？

何で僕はこんなことしているんだっけか…。

『右手デ乳頭ヲ抓ンデ捻ジツテ』

言われるがまま投げ出していた右手をのろのろと胸に這わす。触れる前から痛いくらい固い。人差し指と中指で触ると電流のような快感が背中を駆け上がった。

「はあっ…、あ、…あ…！」

もう一度、と何度もぐりぐり捏ね回す。抓んで弾いて、痛いくらい爪を立てて、腰がソファの座面から浮き上がってみつともなく揺れ始めたのが分かって、一人で馬鹿みたいに声を上げても、奥は欲しくて熱くて、もどかしさで疼いて止まない。こんな身体になったのはいつから？ 前はこんな…——。

『足を閉ジテ腿を締メテ』

内壁が密着して四本の指をきゆうきゆう締め付けた。先端からろろ出てくる白

濁で掌と手首はどろどろで、穴の入り口がぐぶ、ぬちゅ、と大きく啼いた。

「ひっ…、っあ！」

早く出したい。一気に、もうそれしか考えられない。早く早く、次は？ 次はどうしたらいい？

『前立腺を擦ッテ』

中指を曲げて、何度も小刻みに動かす。真似をして。

「は、あ……はあ……っ…」

固く目を閉じる。暗くなつた気がする。夜みたい。前はあいつの手、この次どこを触った？

『右手デ陰茎を握ル』

そうだ。何か恥ずかしいことを言つて触った。

「…っふ、……っあ……！」

期待したよりもずつと冷えた手の温度だった。思い出した。あいつの手は熱いんだ。最後に親指で裏筋を擦る癖をなぞる。何度かゆつくり力を込めて、先走りを指で拭つ

て。

『精液を絡めて上下二擦ツテ』

そう。ゆっくり。だんだんはやく。ああ、そう。あいつの手が熱くて、息が熱くて、触れた場所が熱くて。

「…はッ、…はっ、あ、ああ…っ！」

もうそこ。そこまできてる。ここでいつもあいつ——。

ザザ……——ジ、ジジ、ジ。

………何の音？

「？ ……あ………っ、い、っ………！」

頭は冷え始めているのに、身体はラグを生じて高まり続けている。ソファを噛んだ足の指が痛い。腰が座面を軋ませ何度も跳ねる。手が二本しかないのがもどかしくてたまらない。体中を触って、舐めて、爪を立ててそして。

「ああ！ あ、んっ……！ はあ、あ、ア、い——！！」

声を——。

『スレイン』

「ひっ……………！」

——……………どうして？

真っ白になる。見開いた目に天井の正方形の羅列。四角四角四角四角……………。箱の形だ。箱の天井？ それとも底？

でろ、と吹き出す熱さに体内の温度が全て奪われたようだ。悪寒がして気分が悪い。スピーカーからジ、と前置きのようなノイズ。

『気持ちいいか？』

「ハア、ハア、ハア、ハア…、ハア……………、ハア……………」

いつもの不格好な電子音。…さっきのは何だ？ 伊奈帆の声が…。

『射精シタ。気持ちいいか？』

「……………わからない」

今は気絶するほど気持ち悪い。

『オキシトシン、エンドルフィン、プロラクチンが分泌。眠るか？』

眠れそうもない。絶対に悪い夢を見る事が分かるから。

瞬きすると眩しさを感じた。そう。外は晴れだ。空は青いだろうか。

「……………なあ」

『何だ？』

機械相手に変なことになったな、とは今更ながら思うのだけれど。しかしそもそも僕はもともと壊れて汚れておかしいんだから、このくらい変でも構いやしないか。

「お前、名前は？」

『イナホ』

「…はは」

馬鹿らしくて笑いも続かない。喉が哽れて少し噎せた。伊奈帆。イナホ。お前のせいでもあるんだぞ、僕の気がおかしいのは。お前がこんなものを着けるから、僕はお前を殺すこともできずお前も僕を殺せなかった。しかしそもそもは僕がお前を殺し損ねたことが発端か。自業自得というやつかもしれないな。

『正確にはイナホの一部であつたモノ。寝た方がいい』

「…その言い方、あいつそつくりだ」

瞼が下がる。暗い。黒い。意識が薄れる。次々五感を手放す眠りの淵、最後に残るのは聴覚だ。知っている。

『おやすみスレイン』

暗闇は好きだった。それが怖くなったのはいつからだろう。

毛布越しの手の感触。消える照明。隣に潜り込む人肌。

「おやすみスレイン」

…今それを言ったのは誰だ？

(9)

ジ、ジジ……ジ……………。

「ハア……！　っ……、はあ……ア！　んっ……、ふ……」

『スレイ』

「っあ……！」

どぴゅ、ぴゅ……。

「ハア……、ハア……、ハア……」

『射精完了。眠るか？』

ひどい眩暈と倦怠感。天井がぐるぐる回る。さつき出したモノが冷えて下腹が冷たい。……僕はどうしてこんなことをしているんだろう。

静かになった家電に独り言を言う。

「……お前、前に言ったな。僕が好きって」

『ぼくはスレインが好き』

声は似ていない。でも、音の高低や間。そして言葉の選び方が瓜二つ。錯覚する。
今は朝か？ 夜か？ ここはリビングか？ 寝室か？ この声は伊奈帆か？ 僕は誰か？

僕は「スレイン」か？

「…どうして、そう思うんだ？」

『ぼくはイナホと同一でアツタ頃スレインのことを考えタ』

「それで？」

汗が冷えて鳥肌が全身を覆う。まるで丸焼きにされるまえの七面鳥だ。僕の中に詰まっているものは、とても食べられたものではないだろうが。

『何が目的か。スレインの行動理由をイナホと考えた。ゲツメンキチで交戦した』

「ああ、そうだ」

天井を見つめたままでも、その光景は脳裏にまざまざと蘇った。

『銃で撃ったが、意図的に外した』

不合理なことをしたものだ。らしくない。しかしそれはお互い様か。

『ぼくはイナホの身体でセラムと話しセラムの願いを聞いた』

「お前が？」

どうということだろう。

『イナホはぼくに脳の領域を拡張して、オーバーヒートした』

：意識を失っていたのか。そうか。姫様の願いを直接聞いたわけではないのか。伊奈帆は全てが終わった後でこのアナリティカルエンジンから事の次第を聞いたのか。

『スレインとカタフラクトで戦った。途中でぼくの機能の大部分はイナホによつて停止された』

「あの時か…」

量子アンテナがやられた時の銃撃戦だ。そうか。なら、その後の行動は伊奈帆が全てしたことだ。こいつが喋ったら、あいつはトリガーを引いたろうか。

『イナホから分離されたぼくはイナホとスレインを探した』

そうしてここへ迷い込んだ。いや、迷い込んだという言い方は正しくないか。こい

つは探し当てて辿り着いたんだから。

『救うとは何だ。イナホはカタフラクトに接近戦用の装備をカスタマイズしてスレイ
ンと戦うことを決めた。イナホの目的は無力化し連れ帰ること。イナホはムカエニキ
タ、と言った』

瞼の裏に、あの星の海が浮かんでは消えた。月。基地。戦禍の炎。僕を目がけて凄
まじい動きで幾多の火星兵を一掃しやってくるオレンジ色。

——「無駄だと思うが一応聞く」——

「…最初から決めていたんだ。あいつは」

僕を月から引き摺り出して地に墮とすと。

『生きることが救いか？』

「違う」

『セックスが救いか？』

「違う」

『ゴハンをタベルことが救いか？』

「違う」

熱い。

『涙はなぜだ？』

「…分からない」

いよいよ壊れたみたいだ。身体か、心か。それともっと別の何かが。

『どうして泣いていたのだろうか？』

人間のような途方に暮れた色を滲ませそいつは言った。

『イナホがぼくに何度も聞いた。スレインはノヴオスタリスクのチャンパーでなぜ泣いていた？』

降りしきる雪。光を失った闇。そして銃声。

——「…コウモリ」——

血。血。血。頭部から血を流し動きを止めた人間の体。

『ぼくはイナカツタからワカラナイ』

お前は僕の咎から生まれたのだ。

『ぼくは伊奈帆だったモノ。ぼくは伊奈帆の目的のため生まれたアセイラムを救うためスレインを探すため』

「…知ってはいたが、馬鹿なやつ」

『伊奈帆はスレインが好き。チガウ？』

「…それは、好きという感情ではないよ」

『ジャア何だ？』

好きっていうのは、嘘でもいいから笑ってほしいって気持ちだ。伊奈帆は僕を好きなんじゃない。僕も伊奈帆が好きではない。だって。僕らは嘘つきで子どもだけれど、もうそんな夢を見られないくらい知ってしまった。嘘や欺瞞はいつか全てを崩壊させるということ。

視界に飛び込む色。割って入る声。邪魔でしかないその行動。

「目障りなんだ。お互い」

『伊奈帆はスレインがメザワリ?』

「うん」

『スレインは伊奈帆が目障り?』

「…うん」

『ぼくはスレインが好き』

思わず顔を向けると、テレビは控えめに点滅した。——S・M・I・L・E——

「…お前、本当にあいつそっくり」

こんな状況で笑えるか、と思ったがどうやら笑えていたらしい。そいつが嬉しそうに画面を白黒させたから。

『スレインは伊奈帆が目障り?』

「…うん」

『ぼくはスレインが好き』

テレビが点滅。マイクが拾う掠れた笑い声。

「…お前、本当にあいつそつくり」

白衣の背越しに見えたモニタの映像に伊奈帆は眉を顰める。不特定多数の研究員に仕事とはいえプライベートに踏み込まれて気分の良い人間は少ないだろう。

「どうですか。調子は」

研究員はずらりと並ぶ端末の画面に目を滑らせ、幾つかの数値とグラフを指で示した。

「順調です。音声言語の習得が早いですね。日常会話は完全に成立しています」

「らしいね」

アナリティカルエンジンのプロトタイプ。この左眼窩に収まっていた英知の瞳。解析中のバグでA Iの一部が欠損。重要なパーツの大部分は残留したので、新型、汎用型への影響は少なかった。掛けたピースは消失したかと思つたが。依り代を失いバ―チャルを彷徨つたそれは見つけた。残留思念のようなバグによつて。

かつて僕が探したように。それもスレインを探した。そして見つけた。

「しかし、大丈夫ですかね。彼は」

研究員がらしくもなく雑談を漏らした。集中力と、無駄口の少ないところを買っているのだが。

「問題ない。三大欲求を正しく認識して昇華している」

「…まあ、そうですね。吐いて暴れたあの頃に比べたら」

ドアの凹み。

風呂場の汚れ。

壊れたパソコン。

こぼれた紅茶。

ソファの染み。

日に日に増えるSOSに知って知らぬふりをする。寄生した過去の記録が精神を蹂躪する様を一番近くで見続ける。敵意を意思を力を失い飛ぶことを忘れるまで。

これは独り言か。いいや。これは二人言だ。君と、僕の捨てた去った僕自身との。監視カメラの映像が並ぶ。家中の至る所。数十の目が常に君を見つめている。その中にある目の一つと一つは昔の僕と今の僕。

：そう。逃げられないんだよ。僕からは。もう翼は畳め。嘴に餌を捻じ込んで、爪を縛ってあげるから。

「続けてください」

「はい」

目の端に映す、コードで雁字搦めに成り果てた義眼を模したデバイス。中身はまだ空っぽだ。空けてある。もう一人の僕の為に。

「バージョンアップはいつ頃になりますか」

「そうですね…再来月には」

「来月では？」

「少尉の頼みなら。でも、いいんですか」

これをまた装着するなんて。

「ええ。元々、僕の一部ですから」

さて。そろそろ帰ろう。今日も眠る彼を綺麗にして、服を着せて、栄養価の高い食事を用意してあげないと。そして、聞きたくもないだろう愛の言葉を存分に。

「よろしくお願いします」

「はい。界塚少尉」

飛び立つ本能も正気も希望も消える頃。その翼から羽を一枚一枚筆記取ろう。あの目が聞いた君の思い出は、僕が貰ってあげるから。

——ピ。シュ。暗転。

白衣の研究員はモニタに目をやり一人ごちる。

「…あの人、正気か？」

既に人格を形成したアナリティカルエンジンに、脳の領域を分け与えるなんて。
「二つの頭が身を裂くぞ」

To be continued.

瞼を閉じると闇

発行日 2025 年 6 月 11 日

著者 ミュー

<https://www.pixiv.net/member.php?id=955950>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
